慶應義塾 醫学部新聞

発行所
三四会医学部新聞編集室
〒160−8582
東京都新宿区信濃町35
電話(3353)1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人　比企　能樹
毎月　1回20日発行

新執行部　始動

十月一日より、医学部・病院とも新しい執行部がスタートした。医学部執行部は、左のとおり。歴代医学部長として最も若い末松誠教授には「実行力があり、繊細でいながらものごとを成し遂げる能力が期待される新しい医学部長」いった内外からの熱き期待の声も多数寄せられている。医学部、病院が一体となって激動の時期を乗り切るのにふさわしい布陣に、社中力をあわせて歩みを進めていきたい。

医学部長
医化学教授
末松　誠(62回)

医学部長補佐
人事・財務政策担当
麻酔学教授
武田　純三(52回)

医学部長補佐
病院連携・医療情報政策担当
放射線科学教授
栗林　幸夫(52回)

医学部長補佐
教育・研究政策担当
再生医学教授
福田　恵一(62回)

病院長
整形外科学教授
戸山　芳昭(54回)

副病院長
企画・渉外・広報・薬事全般担当
産婦人科学教授
吉村　泰典(54回)

副病院長
診療部門(病棟)担当
神経内科学教授
鈴木　則宏(56回)

副病院長
医療安全担当
小児科学教授
高橋　孝雄(61回)

副病院長
診療部門(外来)担当
皮膚科学教授
天谷　雅行(64回)

―医学部長就任にあたって―
基礎・臨床一体型医学府から100回生を最高の医師として世に送るために

末松　誠

二十世紀を迎えた明治三十四年元日に福澤先生は「独立自尊迎新世紀」という書初めをされている。医学部長室にあるその掛軸を見て、基礎臨床が互いに融合し一家族の如く築き上げてきた医学部・病院に三四会百回生を迎えるためのテンカウントを開始し、医学部新世紀の医師を育成する最高の医学府を作りたいと考えた。道が容易でないことは明白である。六十二回生の謝恩会で故武見太郎先生は「医学部の歴史は復興の歴史である」と語った。感染症研究に対する周囲の信頼醸成を果たしきれず創立した医学部は間もなく関東大震災を経験するが、損害をばねにして医学部一丸となって地域の医療と復興に貢献することにより社会の信頼を獲得したという。信濃町キャンパスは第二次世界大戦でさらに甚大な被害を受けるものの奇跡的な復興を遂げた。そのような歴史認識の下に昭和の国民的大事業として百二十五年記念の新病棟を建設しようというのが当時の武見先生のご意思であった。先生からいただいた祝辞は「晴れの卒業に際し、諸君は寄付の義務など考えなくてよろしい。昼夜を問わず勉学あるのみ」との檄とともに忘れえぬ記憶である。戦後、医化学教室の末吉雄治教授は同じく戦災で壊滅的な打撃を受けた慈恵医科大学の医化学教室を迎え入れ共に一家族の如く助け合って研究を進めたと聞く。そのような苦労の共有をどの教室も等しく行い、創意工夫を尽くしてきたことを三四会支部の大先輩の先生方やそのご家族から伺い知った。

このような医学部と三四会の先生方がこれまで経験してきた困難や、不可能を可能にしてきた数々の歴史を顧みれば、我々が置かれている状況は決して悲観的な状況ではないのではないだろうか？　不可能と思える目標と大義を掲げないと不可能を可能にすることはできない。

プロフィットを生み、患者導線と待ち時間のない病院のグランドデザインは進んでおり、極近い日に公表できるに違いない。しかしより重要な課題は理想的な病院に勤務する医師・教員・コメディカルメンバーが最速で動く患者導線上で安全な医療業務を完遂する一方で、実地で理想的な若手医師・研究者の育成を行わなければならないことである。医師中心の論理で不可逆的に伸びきった導線や誇りにならない待ち時間の長さが患者中心の論理で改革された結果として生じる診療クラスターを支える教員数の増員はどうあるべきか、その教員業務のミッションや評価基準はどうあるべきか、医学教育の担い手となる教員の充実を限られた財務条件の中でどのように達成するか、をインフラ整備の青写真が見える前に確定する必要がある。そのような状況で百回生を迎えて最高の医師に育成するための準備を行うために医学部に与えられた時間は、テンカウントのうちの長く見積もっても〇・五程度ではないだろうか？　プロとしての医学教育の担い手である世代の待遇改善や、職場復帰の機会がなく、モティベーションがありながら先端医療訓練を受けられない女性医師にも容易に復帰できる教員制度の整備、若手活性化と競争的外部資金獲得に直結する有期専任教授制度（赤丸教授制度）などを実施することにより、過去二十五年の負の遺産をまず早期に解消し、早期に本来あるべきスタートラインに立つことが必要があると考えている。

「改良」「カイゼン」ではない、医学部の教育構造の「革命」を起こすことでゼロベースのスタート点にまず立った上で、残りの九・五カウントで建学の理想を実現できる最高の医学府を創出するプロセスはさらなる困難が予想される。その具体的方法には大手術が良いのか、慶應が得意とする低侵襲手術が良いのか、あるいは画期的な外来化学療法も併用すべきなのか、教授会はもとより講師、助教クラスの先生方、さらには職員各位、コメディカルの皆さんの知恵をできる限り頂きたい。要は革命的な方法で目標を達成し根治療法が行えればよい。

さらに大切なことは我々が発信する信濃町革命を義塾執行部を通じて他学部にも発信していく責務を負っていただきたいことである。我々は総合大学にいるのであり、新しい家族とも古い家族とも連携し先端的かつ学際的な研究者育成をする機会を共有したいと考えている。

このようなメリットを最大限に生かすためには医学部・病院で生まれた革命理論を共有できる厳しさを持つ家族のみが「一家族の如く」融合する北里博士の理想に叶う家族ではないだろうかとも考えることがある。塾長から頂いた「改革なしには病院なし」の大命題の投げかけを「革命なしには大学なし」という命題に代えていく気概を医学部・病院の皆さんや学生諸君と共に共有していきたいと思う。

―病院長に就任して―
新病院棟建設に向けて

戸山　芳昭

この度、十月一日より二年間、相川直樹・前本塾大学病院長の後任としてその職を引き継ぐことになりました。身に余る光栄であると共に、その重責を考えると身の引き締まる思いであります。

前期二年間、医学部・病院の責任者として強いリーダーシップを発揮された池田前医学部長と相川前病院長、そして経営ボード、教授会等の努力により、信濃町キャンパスの構造改革や将来構想が検討され、各診療科の枠を超えた新たな診療体制の構築〝診療クラスター構想〟など幾つかの改革ないし企画案が示されました。また、PET導入を含めた予防医療センター建設計画、別館南棟機能検討委員会も同センター開設に向けて審議を重ねてきました。これと平行して、相川前病院長のご尽力により病院が抱えてきた多くの問題、取り組むべき課題が一つ一つ検討され、その改善に向けた施策が確実に実行されてきました。その結果、塾から指摘された改善すべき重要課題の一つである病院収支は徐々に、しかし確実に改善してきました。

病院では、まず病床管理として診療科毎に決められていた固有床から二百床強を共用床に移行して稼働率の向上を図り、小児の外科系・内科系病棟を診療科の壁を越えた小児総合病棟に再編成しました。また、全国的な看護師不足の中で七対一看護に対応し、土曜日手術枠の新設や中央手術室運用の効率化、薬剤部門の再編成、画像診断のフィルムレス・ネットワーク化等を積極的に推進してきました。画像のフィルムレス・ネットワーク化もいよいよ最終段階に入っております。更にはがん拠点病院構築に向けた整備、病診連携・病病連携の推進等も積極的に取り組んでいます。

私は、この相川前病院長が進めてきた病院改革、慶應病院としての進むべき方向性を継続しつつ、社会的には日本の少子高齢化や経済成長鈍化、グローバル化への対応、人事面では医師・看護師不足への対応や安定した給与体制の構築、そして医療面では医療費抑制政策の中での更なる収支改善、医療安全の確保・徹底、大学病院としての高度先進医療の提供と新規技術開発の推進、共立薬科大学合併に伴う薬学部研修システムの構築など多くの懸案を着実に解決、実行し、塾長が示す「世界トップクラスの大学病院」を目指して誠心誠意努力する所存です。この目標を達成するためにも、塾の協力を得て、塾と医学部・病院が一体となり、信濃町キャンパスでは末松　誠医学部長と力を合わせ医学部・病院が自らの努力により構造改革を積極的に推し進め、予防医療センターならびに悲願である新病院棟の建設を実現化していくことが病院・医学部執行部に課せられた使命と心得ます。

幸いにも、現在、塾長をリーダーとした「信濃町キャンパス改革・刷新プロジェクト」が設置され、急ピッチで改革・刷新計画が進められています。一九一七年に開設された本塾大学医学部は今年で丁度九十周年を迎えますが、二〇〇一年に総合医科学研究棟、いわゆる〝リサーチパーク〟が完成し、慶大医学部の基礎分野は大きな発展を遂げております。基礎医学には世界的業績を発信できる指導者が全国から集まり、そして大きな研究プロジェクトを獲得し、北里柴三郎初代医学部長が掲げた「基礎と臨床の融合した慶應医学」の完成に向け動き出しております。しかし、臨床医にとっては九十年の歴史ある慶應医学が〝臨床の慶應〟と言われ、安全で高度の先進医療を国民に提供し続けてきたという自負があります。今こそ私たちは、この慶應医学九十年の歴史に誇りを持ち、感謝し、そして次の百年に向けた基礎・臨床医学の発展と融合、医学部・病院の構造改革、新病院棟の建設を現実のものとしなければなりません。そして慶應義塾大学病院の理念である「患者さんに優しく、患者さんに信頼される、患者さん中心の医療」「先進的医療を開発し、質の高い安全な医療の提供」「豊かな人間性と深い知性を有する医療人の育成」「人権を尊重した医学と医療を通して人類の福祉に貢献する」の四項目達成に向けて努力し続ける責任があります。

最後に、新しい体制となってスタートしたばかりの病院執行部メンバーをご紹介致します。今期は現在病院が有する多数の懸案をより集中的に責任をもって対応して頂くため四名の副病院長制と致しました。四名の先生方の副病院長としての担当分野は、吉村泰典教授（産婦人科）が渉外・広報・企画・薬事全般、鈴木則宏教授（神経内科）が診療部門（主に入院）、高橋孝雄教授（小児科）が医療安全対策部門、そして天谷雅行教授（皮膚科）が診療部門（主に外来）に決定しております。三四会の先生方には、私を含めた五名の病院執行部に対するご指導をお願いすると共に、悲願である新病院棟建設に向けての多方面にわたるご支援、ご協力の程を重ねてお願いする次第です。

医学生命科学の発展に向けて

山中教授チーム（京大）と岡野教授チーム（慶應）の合体で世界に先駆けた神経再生医療の実現を目指すなど、強力な研究体制の確立に向けて始動。

詳細は四面

京都大学との連携協力に関する基本協定を締結

共同研究・教育活動における更なる連携を目指し、京都大学との間で連携協力に関する基本協定が去る9月27日に締結された。

合同記者会見にて、協定書調印後の様子。左から村井純常任理事、安西祐一郎塾長、尾池和夫京都大学総長、松本紘京都大学副学長・理事

将来構想検討委員会からの報告
診療機能から見た信濃町キャンパスの将来構想とその実現にむかって

将来構想検討委員会委員長　森川　康英

十か月にわたり公開で行われてきた信濃町キャンパスの将来に関する議論が一つの段階を迎えた現在、その内容を総括し次のステップへつなげてゆくことが本委員会の責務であると考えている。

信濃町キャンパス将来構想検討委員会は池田前医学部長のもと、平成十七年秋に設置され、一年にわたる準備会議を経てさらに平成十八年十一月からは信濃町キャンパスのすべての構成員に公開された委員会として月一回の会議ならびに横断的診療機能に関するワークショップを精力的に開催してきた。平成十八年十一月二十日の塾評議員会並びに百五十周年事業委員会では、新病棟の建設を含む計画が承認、発表されたが、同時に医学部・病院の改革・刷新プロジェクトが安西塾長をリーダーとして設置されることとなった。この間の経緯については前稿や他の方々の報告に譲るが、「医学部、病院の改革なくしては新棟建設はない」という強いメッセージを信濃町が受け止めている中での将来構想検討であることを理解していただきたい。私は第一回改革・刷新プロジェクトにおいてオブザーバー参加を許されたので、それまでの信濃町、特に教授会における将来構想に関する提案事項を含めたプレゼンテーションを行った。以後、信濃町の将来構想は医学部の将来構想検討委員会と義塾の改革・刷新プロジェクトが車の両輪となって推進される形で今日に至っている。信濃町では現在の診療体制の問題点とそれを克服する新たな横断的診療体制についての様々な提案が主に診療の最前線を担う若手医師から出され、それぞれについて突っ込んだ議論が診療科の責任者を含めた当事者と関係者、執行部と当委員会の間で行われてきた。すでに診療クラスターという各科横断的な診療体制は周産期・成育、予防医療、神経・運動器、循環器疾患、臨床腫瘍、組織再生、臓器移植についてのWSを終了し、今後感染制御クラスター、画像ガイド下低侵襲治療センターについてのWSが予定されている。また、将来の診療クラスターの構築には現在の中央診療施設等の評価を行うことがまず必要であり、これまでに漢方クリニック、中央検査

（二面につづく）

鑑往知来

外科医としてまだまだ半人前の自分であるが、北島外科名誉教授のお口添えと北川外科教授のご好意のおかげでアメリカはボストンへの留学をさせていただく機会に恵まれた。

ボストンは都市圏人口五百万人、愛称〝Hub〟と呼ばれている。ハーバード大学を始め、マサチューセッツ工科大学（MIT）、ボストン大学、その他の多くの著名な研究所が集積し、その連携が密に行われている。アメリカ人にとって心の京都であり、代表的な研究学園都市である。

ボストンは今年松坂の入団で話題となったレッドソックスの本拠地でもあり、その本拠地フェンウェイ球場は一九一二年オープンの大リーグで使用されている中で最も古い球場である。余談であるが球場にはフェンスもなく、選手の距離が非常に近い。また、相手チームに対する効果音を使った応援が全くないのも気持ちがよい。（ブーイングはその分すごいが?）春から初夏のデーゲームは芝の温度が感じられるほどで、メジャーの記者をして「死ぬなら五月のフェンウェイで死にたい」と言わせるほどの気持ちよさである。

留学中には多くの研修医や専門医、看護師に接する機会があった。アメリカの医療は医療保険や訴訟などが問題であると言われている。確かにかかりつけ医（PCP）によるマネージドケアは徹底されていたが、電話をすれば当日でもPCPには会うことが出来、敷居は高く感じなかった。訴訟は確かに多そうであったが、それほどの問題にはならなかったようであった。

実際に肌で感じたのは一点を除き「慶應の研修医たちは負けていない」ということであった。ただ、アメリカの研修医たちは進路が将来の給料に直結しているからか、知識に貪欲な点で勝っている。日中も、帰宅してからも研修医は「理解」に勉め、指導医に質問を山と浴びせるのだ。

（75回　菅沼　和弘）

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
診療時間＝午前9時〜午前11時
電話＝(3353)1211(大代表)